

この度、結婚いたしました。これまでのお育てに感謝申し上げますとともに、今後ともご助力のほどよろしくお願い申し上げます。

合掌

住職・若坊守



親鸞聖人と妻・恵信尼

この度、おかげさまで結婚し若坊守を迎えることができました。結婚之儀で「親鸞聖人と恵信尼様のようにお互いに相敬し温かい家庭を築くことを、これまでお育てにあずかった方々のご恩に報いることができますよう力を合わせてお念仏の人生を全うすること」を誓いました。

考えてみれば仏教教団において僧侶は結婚してはいけないという考えが主流を占めてきました。それはお釈迦さま当時の出家教団では妻帯が許されていなかった、修行の妨げとなると考えられたからです。結婚していた人は家族を離れ、また夫婦それぞれ出家生活することとなっていました。しかし、親鸞聖人は僧侶が妻帯することが社会的に認められていない時代に、堂々と妻帯された方であることは多くの方の知るところでしょう。

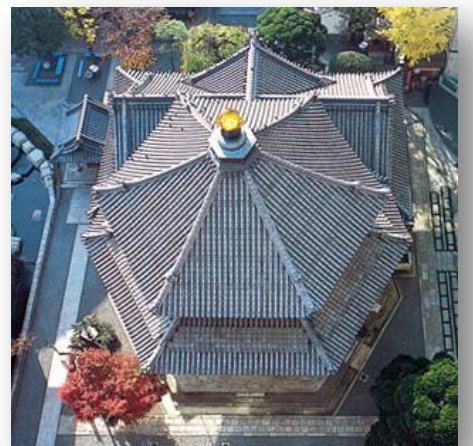
親鸞聖人が結婚されたのは、二十九歳の時に京都六角堂に参籠して本尊救世観音から与えられた、「仏道の修行者であるそなたが

前世からの因縁によって女性と交わりを持つことになるのであるならば、私がすばらしい女性となってそなたの相手になろう。そして一生の間その生活を莊嚴し、やがて来るそなたの臨終にあたっては、極楽浄土へと導こう」という夢告がきっかけであるという説があります。

また、師である法然上人が以下のようにおっしゃられたことが影響しているでしょう。

「現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし。念仏のさまたげなりぬべくば、なになりともよろづをいとひすてて、これをとどむべし。いはく、ひじりで申されずば、妻（め）をまうけて申すべし。妻をまうけて申されずば、ひじりにて申すべし。（この世を生きていくには、何事も、お念仏が称えられるように過ごしていくべきで、お念仏が称えられないような生き方はおやめなさい。たとえば俗世を離れて一人修行する聖者であったとしても、妻を娶った方がお念仏を称えられるというのであるのなら、妻を娶りなさい。また逆に家庭があったとしても俗世を離れて一人修行する身になった方がお念仏を称えられるというのであるのなら、俗世

（法然上人「披講の御影」藤原隆信作）



（上から見た京都六角堂本堂）

を離れなさい)」

結婚も、それによってお念仏が称えられるようになるというのなら、大いにめでたいこと、ということになるのでしょう。以来、真宗僧侶は結婚することが認められてきました。真言宗や禅宗が公に結婚するようになったのは明治期以降のことと聞きます。

そこで社会的に僧侶の結婚が認められていない時代に結婚された親鸞聖人夫妻の姿を通して、私たちが学ぶべきことはないだろうか、考えていきたいと思えます。

ウソのような話ですが、親鸞聖人が本当にこの世に実在した人かと、大正時代に疑われていました。聖人の書かれたもの以外に「親鸞」という名がどこにも出てこなかったからです。親鸞聖人は間違いなくこの世に実在した方であったということが明らかにされたのは大正十年（一九二一）の十月に、西本願寺の蔵で、親鸞聖人の妻である恵信尼の手紙『恵信尼消息』が発見されたからです。これは晩年の建長八年（一二五六）から文永五年（一二六八）までの十二一年間に、京都に住む末娘の覚信尼に宛てたもので、鎌倉時代の女性のまとまった書状としては稀なものであり、恵信尼や聖人の生涯を知る歴史的な資料として貴重なものとなっております。

しかし、世間一般には親鸞聖人の妻がどういう方であったかはあまり知られていません。親鸞聖人には、妻が二人いた、三人いたという学者の人もいますが、確かなことは解りません。

恵信尼以外に親鸞聖人の妻として伝えられる人に玉日という方がいます。先日、研修旅行で玉日姫廟所とされている京都西岸寺を訪ねました。玉日は法然上人に帰依された関白・九条兼実の娘



（京都西岸寺玉日姫廟所）

ていた玉日の存在を証明するものではないかと注目されています。恵信尼と同一人物という説もありますが、いずれにしても親鸞聖人の妻として玉日という名の女性の存在したかどうかは不明です。しかし、恵信尼が聖人の妻であったということだけは間違いありません。



（恵信尼肖像）

恵信尼は寿永元年（一一八二）生まれで、越後の豪族・三善為教の娘と言われています（京都の清流貴族の娘という説もある）。「承元の法難」により越後国府（新潟県上越市国府）に流罪になった九歳年上の聖人と結婚し（京都で結婚したという説もある）、小黒女房、慈信坊善鸞、栗沢信蓮坊、益方入道、高野禅尼、覚信尼の男女

六人の子供に恵まれました。この地で七年、関東に約二十年、その後は都に帰洛され長く聖人と共に人生を歩みました。しかし、七十歳を過ぎて四人の子とともに聖人と離れて越後に帰られました。晩年は打ち続く飢饉に幼い孫たちをかかえ大変なご苦労をされたようですが、お念仏に支えられて力強く生きられ、八十九歳の頃、お念仏のうちに往生されたそうです。

『恵信尼消息』からは、恵信尼は知識と教養のある優しい女性だったことがうかがえ、夫である聖人を観音の化身として敬慕されました。

そのことを、聖人ご往生の後の手紙で、末娘の覚信尼に、聖人を観音の化身であるという夢を見たことを語り、「観音の御ことは申さず候ひしかども、心ばかりはそののちうちまかせては思ひまいらせず候ひしなり。（私は殿（親鸞）が観音さまの化身であられたという夢のことは、申し上げませんでした。しかし、それ以来、私は心の中では、殿は普通のお方ではないのだと思ってお仕えてまいりました）」と記しています。

また、十数年も離れていた聖人のご往生を聞いた時は、「なによりも殿の御往生、なかなかはじめ申すにおよばず候ふ（殿がお浄土へご往生になられたことは確かで、それについては、あらためて申すことは何もございませぬ）」と言



（『恵信尼消息』）



切られ、その翌年のお手紙では「またあの御影一幅、ほしく思ひまゐらせ候ふなり（あの殿のお姿を描いた御影一幅、ほしく思っています）」と覚信尼に頼まれるなど、その文面を見るにつけ、聖人との間柄がどのようなものであったかが偲ばれ、恵信尼こそ、聖人の第一の理解者であり、一番近くにおられた頼もしい同行であったと思われる。そんな恵信尼がおられてこそ、親鸞聖人という希有の宗教者が出世されたのでしよう。

恵信尼の廟所には、恵信尼の墓といわれる五輪の塔がまつられています。昭和三十一年（一九五六）板倉町米増の水田の中に「比丘尼墓」と呼び伝えられる五重の五輪塔が発見され、『恵信尼消息』第八通「五重に候ふ石の塔」とある恵信尼の墓と考えられ、昭和三十八年（一九六三）に本願寺国分別院の飛地境内として整備されました。



（整備された恵信尼の墓所）

それ以来、恵信尼顕彰の地として多くの人に親しまれ、その後、平成十七年（二〇〇五）、多しの里記念館の建設に合わせ廟所も一新されました。数年前にお参りさせていただきましたが、改めて聖人の妻・恵信尼のことを知るきっかけとなりました。

最後に、見義悦子（みよしえつこ、富山県正覚寺坊守）さんが聖人と恵信尼の関係について感じられたことを記した文章を紹介いたします。

「女犯とは、当時の比叡山仏教の戒律の中で、最も重い罪でした。その戒律を犯してまで選ばれたのは在家仏教、どこまでも民衆の中に埋もれて、他者との関係を生きていく生き方だったのでしよう。そして念仏の教えに立ち帰りつづけて生活していく。この立場を選ばれた親鸞聖人にとって結婚は必然であったといえます。」

「仏教では、衆生のことを異生という。異生とは、違って生きておる者ということだ」（藤元正樹師）といわれます。この言葉をいただく時、夫婦という関係を「違って生きておる者」とうけとめる感覚を持ちあわせてきたらどうかと問われてきます。

聖人と恵信尼の関係を、ここに立ってうけとめ直す時、お二人共、共に道場を持ち、門弟を持つ求道者として、決して今私達が持っている夫婦という概念（夫唱婦随、一心同体）ではなく、それを超えて、一人同士の関係を生きておられたのではないかと気づかされるのです。『恵信尼文書』の中に見える、聖人の言葉や姿勢、これは恵信尼もまたうなづいておられた言葉や姿勢であったのではないのでしょうか。決して単に聞いただけの言葉ではなく、深くうなづき、生きてこられた言葉としてうけとめられます。聖人もまた、恵信尼との関係を生きる日々の生活の中で異なりを生きる一人の人間として向きあい、出あい、その人の言葉を聞きつづけていかれたのではなかったのでしょうか。

そんな二人の関係を証するものとして、聖人は恵信尼を、恵信尼は聖人を「観音菩薩」として敬ってこられたという姿勢が語ってくれます。しかもお互いにそのことを言いあっておられない。この言いあっておられないということはとても大事なことだろう

と思います。いつも座り込まない（相手をわかったものにならない）関係を生きつづける生き方に通ずることだと思ふからです。聖人と恵信尼のこの関係を生きる中から感じとられたことが『教行信証』の中に込められているのではないかと感じています。一番身近な人との関係を通して世界が見える、そんな教えを、今私たちは、真宗門徒として聞いているのではないのでしょうか。」

この度の結婚に当たり、その重みを感じますが、親鸞聖人と恵信尼様をお手本にいかにか夫婦、家族の関係を築いていくのかをお念仏の中に見出していききたいものです。



（彼岸花とてんとう虫）



（美しい彼岸花）